

書 評

チャンドラー・パール 著, 金子浩 訳

匂いの帝王

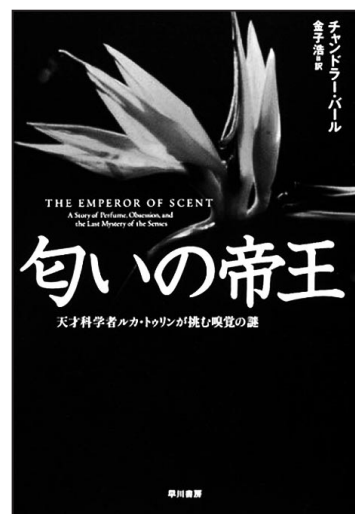
天才科学者ルカ・トゥリンが挑む嗅覚の謎

早川書房

ISBN 4-15-208536-3

2003年発行

評者：豊橋技術科学大学 北崎充晃



本書はノンフィクションである。つまり、小説でもないが、科学書でもない。科学者にして匂いと香水の専門家であるルカ・トゥリンの戦いの記録である。嗅覚についての研究は、視覚や聴覚に比べて遅れており、視覚における電磁波の波長と錐体・杆体、聴覚における空気振動周波数と蝸牛に対応するフロントエンドの受容機構すらよくわかっていない。現在は、分子の形状とそのレセプターによる形状説が有力であるが、ルカは分子の波数と電子トンネル効果を用いた分光器による振動説を提案する。しかし、いくつかの理由により彼の理論はなかなか受け入れられず、長く厳しい Nature 誌および権威者との戦いが繰り広げられる。本書は、匂いの形状説、振動説ともに一般向けの解説となっており、科学啓蒙書としての価値もあるが、そのおもしろさは圧倒的に香水・匂いに関する物語と彼をめぐる科学的闘争、むしろ科学社会における闘争にある。つまり、本書は香水と科学をめぐるよくできたエンタテインメントである。

ルカの理論がなかなか受け入れられないのには大きく三つの理由がある。一つは、その理論が真に学際的であり、量子力学、生物学、化学、そして実は心理学(これは本書には明記されていない)のすべての理解を必要とすることである。特に量子力学の不理解が従来分子生物系の科学者の混乱を招く。同時に、分子の匂いをかぎ、その違いを客観的証拠としようとする態度(これはまさに心理学である)が受け入れられない。色の違いと匂いの違いが同一次元になく、前者は客観的存在だが、後者は主観の世界だと言われる。心理学者からすれば、どちらも間違いだ。二つめは、実証的証拠、つまり実験が少なく、その手法もデータもお粗末な点である。ルカが実験を軽んじているのが問題だが、純粋な理論論文としては実験の精密さは割り引か

れるべきだとも思う。三つめは、学会・社会において彼の天才性と性格がもたらす混乱と権威の問題だ。本書はこの問題を大きく扱っている。しかし、ルカ側の視点が圧倒的に多く、反対側の視点からの情報が少なく一方的である。著者もこの点を問題とし、反対側に連絡をとったがまともに相手にされなかったと記している。しかし、科学者のマスコミへの不信感を考えれば(科学に限らず取材結果は、取材者の主観によってねじ曲げられ伝えられてしまうことがある)、必ずしも彼らを全面的に非難はできないだろう。

彼を天才と評させていることの一部、協調性のなさ、行動の突飛さ、多方面への分散的興味は、ときとして周囲に実質的被害と嫌悪感(フロア中を悪臭で充満させ、講義をすっぱかし、論文を書かず、地道なポスター発表なんてまんざら御免被る)をもたらすが、彼は「1%の変わり者を大目に見てくれたっていい。みんながぼくみたいになってほしいなんて望んでいない。」という。凡庸な存在である私は、ルカの同僚や学会会員のいらだちも理解できるし、そのような行動のリスクが高いことも理解できる(世の中にはリスクが高いのだから許してやれ、という風潮がある)。だから、この問題にはひとつの解はない。ルカが今後ノーベル賞をとるか、その新振動説が主流になったときに彼は勝利を勝ち取るだろう。天才は、そうやって勝利を勝ち取って初めて天才と認められる。だからハイリスク・ハイリターンなのだ。世の中にはプチ天才が少なからず存在し、虎視眈々と、いやむしろ騒々しく荒々しく常に大勝利をねらっている。そして、もっとも偉大な科学的発見は、不可逆的に世界観を修正できる「科学」という試み自体の発見だというルカの意見には大いに賛成する。

最後に、本書を読めば香水と匂いをもっと楽しめるようになるのは間違いない。